石川県立美術館だより

平成13年12月1日発行　第218号

県指定文化財　四季耕作図屏風（部分）　大乗寺蔵

目　次

天神画像と文房具、大乗寺の名宝 ……2
常設展示室 主な展示作品……3
展覧会回顧（ナンシー派展、作庭記の世界）…4
美術館小史・余話（17）……4
文化財現地見学報告、ミュージアム・コンサート …5
企画展示室、美術館の本…… 6
各地の展覧会、貸出中の所蔵品 ……6
企画展TOPIC、十二月の行事案内他　……7
所蔵品紹介、ミュージアムショップ通信 …8

常設展示室で音声ガイドサービスを開始!!

ホームページアドレス　http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

常設展示室（前田育徳会展示室）

特　集

天神画像と文房具

11月29日（木）～12月24日（月・振休）

天神は菅原道真（菅公）を指し、その信仰は学問・詩文に優れた菅公を崇拝し、画像などを祀り、詩文を詠じたりするものです。平安時代中頃以降、菅原道真を祭神とする天神信仰の発生と広まりにともなって、信仰に関する美術・造形も多様な様相を見せています。

天神に関する画像については、道真の死後間もない延喜年間に早くも「菅家之影像」が描かれたと伝えられていますが、現在伝えられる画像類から見ますと、鎌倉時代初期の「天神縁起絵巻」に初めて天神の画像が描かれ始めたものと思われます。

室町時代に天神信仰が禅宗と結びつき、唐服に梅樹などを持った姿で描かれる「渡唐天神画像」を始めとして、天神画像制作が盛んとなり、版画などにも刻されて礼拝対象としても広まるようになったと思われます。そして、今日最も多く見られる束帯姿のものにも、多くの様式が見られるようになります。例えば、怒気を含み、丸く巻いた綱の上に座すもの、梅樹の下で水面を眺めるもの、上畳の上に威儀を正して座す神像形式のものなどがあります。前田育徳会にはこれらの様式のものが残されており、前田家と加賀藩の天神信仰が篤かったことがうかがえます。

文房具の収集は、文人のたしなみとして、歴代藩主が主に中国伝来の品を愛玩しました。文房具には四宝（筆・墨・紙・硯）のほか、筆架・文鎮・硯屏・水滴等と多種にわたり、実用性とともに書斎の愛玩品としても鑑賞に値するもので、高価な素材に工人が精妙を尽くした造形が見事です。文化大名として高名であった前田家の高雅な趣味がうかがえます。

常設展示室（第2展示室）

特　集

―加賀の古刹―

大乗寺の名宝

11月29日（木）～12月24日（月・振休）

金沢市の長坂町に位置する曹洞宗寺院・大乗寺に伝存する文化財を紹介します。その始まりは、当地の守護であった富樫家尚が弘長元年（一二六一　三年とする説も有り）、一寺を野市（現在の石川郡野々市町に建立し、真言僧澄海を住持させたことによる、と伝えられています。後に澄海は、正応四年（一二九一）、永平寺より徹通義介を招き禅寺として開山。大乗寺は、永平寺以外に建てられた最初の曹洞宗寺院であることから、「曹洞宗第二の本寺」とも称されるのです。

続く二世瑩山紹瑾（永光寺・総持寺開山）、三世明峰素哲（永光寺二世）の時期にその基礎は築かれ、室町時代以降も、足利幕府の祈願寺として寺領・屋敷を安堵されてきました。しかし十五世紀末、一向一揆によりその保護者であった富樫家が滅亡。その平定にあたった柴田勝家の兵火に遭い、大乗寺も焼失するのです。

その後、前田利長（二代加賀藩主）の臣下にあった加藤重廉により金沢木ノ新保町（現在の金沢市本町）に移転・再興。慶長六年（一六〇一）、更に本多政重（加賀藩老臣本多家の家祖）により、その下屋敷の隣接地である石浦大乗寺坂（現在の金沢市本多町）に移ります。

二十六世の月舟宗胡は大乗寺中興の祖といわれ、これよりその復興が始まります。宗規の回復とその移転計画が進められ、二十七世卍山道白の時代も続きます。やがて元禄十年（一六九七）、二十八世明州珠心の時、藩より与えられた現在の地に移転するのです。

現在、当館に一括寄託される大乗寺の文化財は、古文書・絵画・工芸の類などですが、中でも曹洞宗高祖・道元が記した『佛果碧巌破関撃節』『羅漢供養講式稿本断簡』、義介・紹瑾・素哲による『三代嗣法書』など、五件の曹洞宗関係文書は重要文化財に指定されています。今展では、これらの文書と歴世の頂相の展観に加え、『四季耕作図屏風』（石川県指定文化財）など大乗寺が所蔵する近世絵画も紹介します。

□三世明峰素哲　頂相　大乗寺蔵

常設展示室

主な展示作品

11月29日(木)～12月24日(月・振休)

◉＝国宝　◎＝重要文化財　○＝重要美術品
□＝石川県指定文化財

マライの娘達　宮本三郎

□色絵鳳凰図平鉢　古九谷

前田育徳会展示室

特集　天神画像と文房具

渡唐天神像
北野神前開眼菅公画像
破月起雲硯
七宝硯屏
青貝五角軸筆
銅獅子筆架
白玉馬猿文鎮
白高麗上手水入

第1展示室

◉色絵雉香炉　野々村仁清
◎色絵雌雉香炉　野々村仁清

第2展示室（古美術）

古九谷

○□色絵布袋図平鉢
□色絵鳳凰図平鉢
□青手樹木図平鉢

特集　ー加賀の古刹ー　大乗寺の名宝

◎佛果碧巌破関撃節上・下　道元
◎羅漢供養講式稿本断簡　道元
◎韶州曹溪山六祖師壇経　義介・紹瑾・素哲
◎三代嗣法書
◎支那禅刹図式

第3・4展示室（油彩画・彫塑・造形）

油彩画・素描

女　鈴木　博
ポンペイ好日　高光一也
砂漠の町ヒワニースの灯台　田辺栄次郎
黒いタイツ　藤本東一良
マライの娘達　南　政善
渡船場　宮本三郎
大地と集落　村田省蔵
森本仁平

彫塑・造形

泉お汲む　矩　幸成
落下　久世建二
大地悠久　南雲　龍

第5展示室（工芸）

陶芸

椿花鉢　北大路魯山人
色絵山草文壺　宮川哲爾

漆芸

呉竹漆盛器　小松芳光
庭の草道沈金彫手筥　前　大峰

染色

雲海　堀友三郎
友禅白地孔雀文訪問着「孔雀文」　羽田登喜男

金工・刀剣

加賀象嵌四季の花飾り壺　高橋介州
太刀　銘臨兵闘者云々　隅谷正峯

木竹工

欅造盛器　川北良造
神代欅花文象嵌食籠　福田芳朗

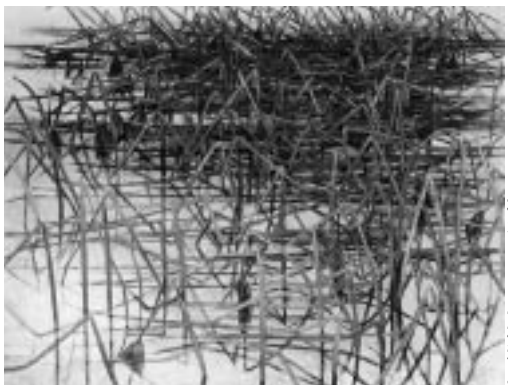
第6展示室（日本画）

埴輪　上田珪草
蝕　梅川三省
魔術師　坂根克介
黄樹のある風景　下村正一
山の秋　玉井敬泉
更　羽根万象
枯れはす　平桜和正
岩壁　曲子光男

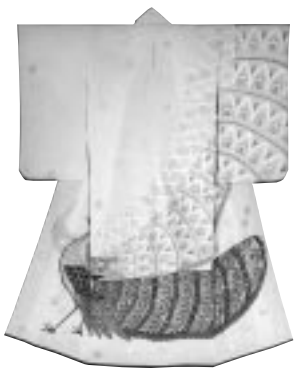
※このページでは各展示室作品の主なものを掲載しています。（第1展示室は色絵雉香炉二点のみ。）

◆観覧料

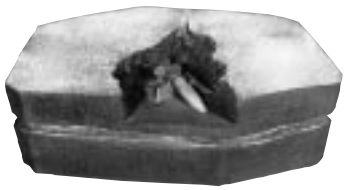
個人	一般	350円
	大学生	280円
	高校生以下は	無料
団体（20名以上）	一般	280円
	大学生	220円
	高校生以下は	無料



枯れはす　平桜和正



友禅白地孔雀文訪問着「孔雀文」　羽田登喜男



大地悠久　南雲　龍

展覧会回顧

花と装飾　ナンシー派展

ナンシー派の持ち味は、自然、とりわけ植物からヒントを得た独特の曲線からなる装飾スタイルにあります。折しもナンシー市の姉妹都市金沢では、全国都市緑化いしかわフェアを開催中。しかも今年はナンシー派が一九〇一年に設立されて、ちょうど百年の節目を迎えました。金沢での展覧会開催には、またとない好機だったといえるでしょう。

展示作業期間中（八月二十九日～三十一日）には、監修者のナンシー派美術館ヴァレリー・トマ館長と、ナンシー国立芸術学校クリスチャン・ドゥビーズ教授がお見えになり、作品点検に立ち会われました。お二人とも金沢での開催を、とても楽しみにしておられたご様子で、展示上のアドバイスなどにも自然に力が入り、懇切丁寧にご指導下さいました。

ナンシー派を代表するガラス工芸作家、ガレやドームの作品が出品される展覧会は、日本でもたびたび開催されており、今やそう珍しくもありません。でも今度はガラス工芸品だけではなく、家具、染織、絵画、本の装幀、デザイン案に至るまで、ナンシー派芸術の全貌を紹介する初めての展覧会として注目を集めました。また華麗な作品群の中にあって、日本画家高島北海のコーナーは異彩を放ち、今回その存在を初めて知って、「アール・ヌーヴォーにこれまで以上の親しみを覚えた」という声も耳にしました。

開催期間は少し短かめでしたが、お陰様で好評のうちに幕を閉じることが出来ました。お世話下さいました関係各位に、心より感謝申し上げます。

（前田武輝　学芸主査）

ナンシー派展会場（第9展示室）

作庭記の世界

本展は第18回全国都市緑化いしかわフェアの協賛事業として開催されました。重要文化財「作庭記」の上下二巻が、展覧会の全期間を通して余すところなく公開された例は、少なくとも筆者の知る限りこれまでになく、今回所蔵者のご厚意により、こうした貴重な機会が実現しました。

まず全巻を通覧して気づくことは、筆跡が一様ではないことです。さらに同じ文字の書き方の相違に注目すると、今回公開した写本の筆者は、複数いたことが確認できます。また、純粋に庭作りの実用的な事柄に関する部分の記述と、思想的な含蓄のある部分の筆跡の相違も興味深いものがありました。こうした「小さな発見」が実物を鑑賞する醍醐味であり、会期中来館者から筆跡について多くの質問を頂いたことは、私共としましても大きな喜びでした。

その上今回は、全国から「作庭記」を深く読み込んでおられる方々が多数来館されました。周知のように「作庭記」には複数の注釈書や現代語訳があります。そして、それらの間には若干の研究者の解釈の相違があります。たとえば下巻の「樹事」で、玄武をあらわすために三本植えるべき木は檜なのか楡なのかというのはその代表例で、実見することによって楡と読むほうが自然だと納得された方が多かったようです。その他文字の消え方についても、自説を披露してゆかれた方もありました。これは、作品に対する情報が多く、一般の関心が高いほど、実物を鑑賞する機会を設ける必要性が増すという、美術館の使命を改めて痛感させる一事でした。

（村瀬博春　学芸主査）

美術館小史・余話 17

嶋崎　丞（すすむ）　当館館長

昭和四十年代に入り、美術館の活動もようやく軌道に乗ってきた。美術品の収集家や先輩の国公私立美術館からも信頼を得て、企画展開催のための美術品も借用できるようになってきた。こうした状況の中にあって話題にのぼってきたのが「展示活動ばかりではなく、美術館へやってきた人々に対し、展示作品の解説等を行う、いわゆる教育活動を実施すべきではないか」ということである。しかしその当時学芸の仕事を担当していたのは、私を含めて三名。その三名で企画、交渉、借用、展示、図録の編集、広報のすべてをこなし、その上解説活動までを実施するということになると、正直いって大変であった。

そこで考え出されたのが、当時初めて試験的に実施され始められていた「マグシーバー・ガイド方式」の導入であった。今でいうオーディオガイドの走りである。今日のオーディオガイドは、そのほとんどが、録音された解説を収めた器具を入館者が持ち歩いて、展示作品に表示されている番号等を選択して聴く方式をとっている。これに対しマグシーバー・ガイド方式とは、まず展示作品を見る順序に従って解説を録音し、その解説を展示室の周囲に張り巡らした有線を通して磁波として発信する。その有線の囲みの中に入れば、入館者はイヤホーンを通して磁波を受信し解説が聴ける、という仕組みである。ところが二つの展示室が接近している所は、それぞれの展示室の解説が入り乱れる、いわば混信状態に陥り、これには多くの方からお小言を頂戴してしまった。しかし何はともあれ、視聴覚機器使用による最初の教育活動を始めることができた。

教育普及活動の開始（一）

文化財現地見学報告

観音寺（福知山市）

第31回文化財現地見学は「舞鶴と福知山の文化財を訪ねて」と題して、去る十月二十日（土）、二十一日（日）の二日間に渡って実施されました。参加人数は四十三名。今回初めて丹後、丹波地方へと足をのばしました。

二十日早朝、美術館前を定刻通りに出発。最初の訪問先は**金剛院**（真言宗・舞鶴市）。舞鶴に入るのが少し遅れてしまい冷や汗が出ましたが、予定の法事の時間が迫りながらも、にこやかに出迎えて下さったご住職のお姿に救われ、宝物殿でご説明を有り難く拝聴しました。秋陽に映える三重塔（重文）が美しく、紅葉の頃に、またゆっくりと散策してみたい所でした。

午後は**天寧寺**（臨済宗・福知山市）へ。私たちのバスを横目に、法事から寺へ戻られて、急いで宝物庫へ駆け込んだというご住職。本堂で寺宝を前にしてのお話は、立て板に水の如く、そして話題豊富。話にぐいぐい引き込まれ、身を乗り出すようにして聞き入っておられた、皆さんの姿が印象的です。薬師堂の建築様式や龍の天井絵の見事さに、しばらく目を奪われました。裏手にはまだ原生林が残っています。

福知山の東外れにある**観音寺**（真言宗・福知山市）が次の訪問地。この寺は「丹波あじさい寺」といった方が通りがよいようで、一万株もの紫陽花が咲きほころぶ六月から七月にかけて、大勢の人出で賑わいます。堂内の欄間、宮殿の造り、天井板一枚一枚に描かれた草花など、どれも見応えがありました。が、それにもまして、ご住職の滋味にあふれたお話に感銘を受られけた方が多かったようです。

さてこれは、ご参加の皆さんのスムーズな団体行動のお陰です。**福知山市美術館**に、入場券の発券終了間際、スベリこみで入館出来ました。この館は到着時間が閉館ぎりぎりになることが予想されたため、今回予定コースから外していた所です。束の間の鑑賞でしたが、日本画家佐藤太清（たいせい）の数々の作品は心を和ませ、一日の疲れを癒してくれました。

福知山のホテルに泊まった翌朝は、**照福寺**（臨済宗・綾部市）から。ここは約百六十年前に造られた枯山水庭園（名勝）が見所です。あいにくの小雨模様でしたが、かえって古苔や石の色がしっとりと、落ち着いた色合いに…。ご住職のご説明を伺いながら、巧みに構成された古庭園の美を堪能させていただきました。

舞鶴へ戻り、**円隆寺**（真言宗・舞鶴市）の総門をくぐります。丹後きっての古刹の一つと称せられるだけあって、さすがに見所の多いお寺。ご住職の軽妙なご説明は、面白く、飽くことなく、本当に時間を忘れさせて下さいました。参道の一部には、舞鶴らしく赤煉瓦が使われていたのも心に残ります。

最後は**舞鶴市立赤れんが博物館**。煉瓦一つでこんなにも話題があるのかと、唸ってしまいました。様々な切り口で見せてくれる煉瓦の新しい魅力、そんなことを実感された方が多かったことでしょう。

雨足の少し強くなってきた舞鶴を後にして帰路につき、夕刻金沢へ帰りました。二日目の雨も小雨程度ですみ、無事全行程を終えることができました。ここにご参加の皆様と、各見学地で大変お世話下さいました関係各位に深く感謝を申し上げます。また次回のご参加をお待ちしております。

（前田武輝　学芸主査）

ホール

第87回ミュージアム・コンサート

「アンサンブル金沢メンバーによる室内楽」

日　時　一月二十七日（日）午後一時三十分～

※プログラム、演奏者等詳細は次号でお知らせします。

※入場に際して入場整理券が必要になります。詳細は左記をご覧下さい。

◇入場整理券申し込み方法

・往復はがきでご応募いただき、入場整理券（招待券）を発行します。応募多数の場合は抽選いたします。

・往信用はがき裏面には「第87回ミュージアム・コンサート希望」と明記し、住所・氏名・年齢をお書き下さい。

・返信用はがき表面には返信先（住所）をお書き下さい。

・返信用はがき裏面には抽選結果を印刷しますので、何もお書きにならないで下さい。

・一月十一日（金）必着です。

◇応募にあたってのご注意

・応募、入場資格は中学生以上に限ります。

・入場者一名につき、往復はがき一通でご応募下さい。お一人で何通も出されたものや、年齢、返信先等の記載事項が不十分なもの、連名のものは無効となります。また同一の住所、筆跡で多数ご応募された場合は、当選枚数を制限させていただくことがあります。

・当日キャンセルによる空席が生じた場合は、締め切りまでにご応募いただき、抽選もれとなり、所定の手続きをとられた方に入場していただきます（詳細は当館からの返信をご覧下さい。）。

・当館からの返信は、再発行いたしません。

応募先

〒921－0963　金沢市出羽町2－1

石川県立美術館ミュージアム・コンサート係

企画展示室

第47回一陽展　金沢展

十二月十二日(水)～十七日(月)
(第7・8・9展示室)

今秋、東京都美術館で開催された第47回一陽展の出品作品より選抜された基本作品と北陸三県在住作家の地元作品の油彩画・アクリル画・版画・彫刻の百二十余点を展観します。一陽会は表現様式のいかんを問わず多彩な作家群を擁し、抽象と具象の多彩な作風が競合する展覧会です。ベテラン作家の秀作から尖鋭な若手作家の力作をご鑑賞下さい。また、長年にわたり一陽会北陸支部長を務められ、石川の美術界にも貢献された故中村秀雄委員（昨年十二月逝去）の遺作も展示します。

主な出品作家
〔絵画〕大石可久也　勝一晃　北山泰斗　棚瀬修次　森秀雄　大場吉美　故中村秀雄　酒井幸雄　判三教　野中未知子　安田淳〔彫刻〕植木力　阿部雪子

入場料
一般七〇〇円　大学生五〇〇円　高校生以下無料
（団体料金は各二〇〇円引き）
※当館友の会会員は、会員証提示により団体料金。

〈連絡先〉金沢市粟崎町二―八六　大場吉美方
北陸支部事務所
☎〇七六―二三八―三〇九六

第86回公募写真展研展

十二月十九日(水・午後一時より)～二十三日(日)
(第7展示室)

東京写真研究会が主催する研展は、本年八十六回目を迎えます。本北陸部展では、会員の部より百十九点、公募の部より六十一点の合計百八十点を紹介します。本年、会員・公募の両部門において、県内在住者が最高賞を受賞しました。会員の部では文部科学大臣賞に大橋吉郎、公募の部では東京都知事賞に宮下和子の両氏が輝いています。その他、会員の部では研展賞に橋端末治、公募の部では東研賞に津田朝子、東研奨励賞に中村省三・堀江俊明・中嶋雄二の各氏が受賞しました。

入場無料
〈連絡先〉金沢市野町四―九―一三　内島一郎
☎〇七六―二四一―二二七九

第25回日創展&新院展選抜金沢展

十二月二十日(木)～二十三日(日)
(第8・9展示室)

同展は襖絵、屏風絵を始め日本画を中心に公募した作品の中より約七十点を展示。金箔、砂子等の技法を生かした、会長丹羽俊夫の襖絵五枚組の大作を始め、二十才代から八十才代の幅広い年齢層の会員の作品が、日本画の流れを見せています。また丹羽俊夫が審査運営委員長を担当している新院展（東京）の作家の作品も、約四十点を選抜して展示します。

主な出品者　丹羽俊夫　三宅厚史　今村文男　北出朝之　保科　誠　作田保夫　柴田輝枝　南　好乃　中村勝代　桟　勝正　石井宝山　真浄光葉　丹羽俊夫

入場無料
〈連絡先〉金沢市窪一―二三三
☎〇七六―二四四―五九一六

―（美術館の本）―

	税込定価（円）
石川県立美術館所蔵品図録	三、五〇〇
―没後10年―　高光一也展	二、〇〇〇
―石川県立美術館所蔵―　茶道美術名品図録	二、五〇〇
加賀藩一代藩主前田利長の菩提寺　瑞龍寺展	二、三〇〇
15～20世紀のロシア美術　イコンと絵画	二、〇〇〇
日本のわざと美展　―重要無形文化財とそれを支える人々―	二、〇〇〇
前田利為と尊経閣文庫	二、〇〇〇
工芸作品と図案　―創造への思考―	二、〇〇〇
前田利家没後400年　利家が生きた　桃山時代の美術	二、五〇〇
没後25年　写実と幻想の巨匠　宮本三郎	二、三〇〇
初公開　欧州随一の日本美術コレクション　ランゲン夫妻の眼	二、〇〇〇
―石川県立美術館所蔵―　九谷名品図録（改訂版）	二、〇〇〇
没後15年　一期は夢よ　鴨居玲展	二、〇〇〇
彫刻家　吉田三郎	二、〇〇〇
花の様式　ナンシー派展	二、二〇〇
最新刊	
花と緑の名品展　―自然との対話―	二、〇〇〇

※ミュージアムショップで販売中!!
郵送ご希望の方は当館へ電話でお問い合わせ下さい。
（☎〇七六―二三一―七五八〇）

各地の展覧会　十二月

※開催日程、休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

時を超えて語るもの
―史料と美術の名宝―　12／11～1／27
東京国立博物館（東京都台東区・〇三―三八二二―一一一一）

カラヴァッジョ
光と影の巨匠―バロック絵画の先駆者たち　12／16まで
東京都庭園美術館（東京都港区・〇三―三四四三―〇二〇一）

愛と放浪の画家　竹久夢二展　12／16まで
富山県水墨美術館（富山市・〇七六―四三一―三七一九）

時の旅人たち―1980年以降の美術―　11／17～1／20
愛知県美術館（名古屋市東区・〇五二―九七一―五五一一）

女性たちの陶芸展
―女流陶芸と欧米作家たちとの競演―　12／1～1／27
滋賀県立陶芸の森陶芸館（滋賀県信楽町・〇七四八―八三―〇九〇九）

京都市立美術館コレクション展
第4期・生活を描く　1／14まで
京都市立美術館（京都市左京区・〇七五―七七一―四一〇七）

西大寺　興正菩薩叡尊　1201―90
―民衆を救った生き仏―　12／1～24
奈良国立博物館（奈良市・〇七四二―二三―五九六二）

貸出中の所蔵品

彩瓷芋版壺　石黒宗麿作　計一点

展覧会　京都の工芸　1945―2000
会　期　十二月一日(土)～二月十一日(月)
会　場　東京国立近代美術館工芸館

曲輪造朱溜金彩盤　赤地友哉作
大般若理趣分経之箱　氷見晃堂作
他四点、計六点

展覧会　「日本のわざと美」展
―重要無形文化財とそれを支える人々―
会　期　十一月三十日(金)～十二月二十三日(日)
会　場　島根県立美術館（松江市）

企画展TOPIC

アフリカ彫刻と写真

今回の展示では、高光先生の遺愛の品やアフリカ彫刻のコレクション、趣味の域を越えた感のある写真などを作品と合わせてご覧いただきます。画家の内側、つまり、高光芸術のバックボーンを少しでも覗けないだろうか、先生はこの時期どうしてこうした傾向の作品を描いたのだろうか、といったようなことを、これらの品々に触れることで、考えるよすがにしたいと思うのです。

さて、アフリカ彫刻のコレクションとは？。

今から二十年ほども前になりますが、昭和五十五年に小松市立博物館で「高光一也コレクション アフリカンアート展」と題して七十八点のアフリカ彫刻が一堂に展示されたことがあります。大きな鳥の像や、母子像、マスク、さらにはパイプ、腰掛けや櫛などバラエティに富み、アフリカ美術に寄せる関心の深さがうかがえるのですが、これらが全てではなく、まだまだある中からセレクトしたものが、この時の作品でした。

（右）母子　昭和34年
（左）モンパルナスの藤田さん　昭和59年

アフリカ彫刻との出会いは、初めてパリに行った昭和二十九年のことでした。ジャコメッティの細長い彫刻や、ピカソのゲルニカを連想させる造形美と抽象美に魅せられたのです。前回「画風の変遷その2」で述べた、第2の時期、人物をどのように抽象の時代に合致させるか、その答えの一つがアフリカ彫刻にあったのだと思われます。

「母子」は昭和三十四年の作品ですが、この細長く引き伸ばされ単純化された形体は、バンバラ族やドゴン族の母子像に、強く結びついているといっていいでしょう。むろん形だけでなく、この時期の限定した色彩そのものに、アフリカの美術の影響をみることも可能だと思います。

一方写真についてですが、昭和五十九年の作品で「モンパルナスの藤田さん」という珍しいテーマの作品があります。バックに大きな鶏の絵が描かれ、その前に藤田嗣治がにっこり笑っているという不思議な絵で、これは先に述べたアフリカ彫刻と出会ったパリ時代に写した写真が元になっています。初めてのパリに臆することなく、藤田にアトリエの世話までしてもらったとは驚きですが、藤田と連れだって買い物に行き、パリ名物の巨大なポスター、しかもカーボンと書いてありますから、石炭のコマーシャルなのですが、ちょっと気が利いて面白いからということで写したスナップ写真なのです。

実に沢山の市井を写した、味わい深い写真が残っていますので、高光一也という希代の眼が切り取った空気を、十二分にご堪能いただけるのではないかと思います。

（二木伸一郎　学芸主査）

＊**「没後15年 高光一也展」**
平成十四年一月四日(金)～二十七日(日)

次回の展覧会

特別陳列　利家と末森の合戦　（前田育徳会展示室）
特　集　名刀と槍　（第2展示室）
※以上の展覧会は、大河ドラマ「利家とまつ」放映協賛です。
特　集　明治の工芸　（第5展示室）
企画展　没後15年　高光一也展　（第7～9展示室）
一月四日(金)～二十七日(日)

十二月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
12／1(土)	土曜講座	レンブラント　人と芸術　（織田春樹　学芸主任）	講義室
12／2(日)	月例映画会	古代エジプト・遥かな原風景　ピラミッド空間の出現（23分） 秘伝の赤絵　―色鍋島―　十二代今泉今右衛門（23分）	ホール
12／8(土)	土曜講座	殖産興業とジャポニズム　―「明治の工芸」鑑賞の手引き―　（寺川和子　学芸員）	講義室
12／9(日)	月例映画会	古代エジプト・遥かな原風景　ツタンカーメン黄金幻想（23分） 神々の器　壺屋の陶器　金城次郎（25分）	ホール
12／15(土)	土曜講座	不思議な絵の世界　3　（西田孝司　学芸主査）	講義室
12／16(日)	CDコンサート	バッハのカンタータ（約47分）	ホール
12／22(土)	土曜講座	大乗寺の歴史と名宝　（北澤　寛　学芸主任）	講義室
12／23(日)	月例映画会	うるしを現代にいかす　曲輪造　赤地友哉（31分） 木工芸　大野昭和齋の指物のわざ（30分）	ホール

※年末年始の全館休館日は十二月二十五日(火)～一月三日(木)です。

魔術師

坂根克介　昭和20年（1945）～

昭和56年　1981

第13回改組日展

縦225.0　横165.0（cm）

白い背景のなか、中央に黒いタキシードを身につけた奇術師を真正面からとらえた、シンプルな構成となっています。赤いスカーフを取り除くと、黒いシルクハットから鳩が飛び立ち、背景の白の空間に溶け込んでいくような場面を描いています。作者はこれまで、主に人物を真正面からとらえ、装飾的に表現してきました。そこには、わが国の絵画表現の伝統が息づいているようです。

日本画は、古来、遠近法や明暗法などを駆使し三次元空間を仮想するという方向に向かわず、絵画本来の平面性をそのまま生かして、そこに生活感情を表現する装飾的、抒情的性格の強い傾向がうかがえます。今日の日本画の表現にもそうした特性は見られるところですが、特に作者の表現には顕著に現れています。しかしそれは、薄っぺらい表面的なものではなく、現代人の視覚に耐えうる重厚な厚みをもった強靱な表面を形成しているといえるでしょう。丹念に重ねられた色彩は、日本画独特の顔料の美しさを保ちながら、深みを帯び、そのコントラスト、ハーモニーが、視覚に心地よいインパクトを与えるのです。

坂根克介（さかねかつすけ）氏は、大阪市守口市に生まれ、昭和四十四年金沢美術工芸大学を卒業。西山英雄に師事。在学中の四十三年日展に初入選。五十一、五十三年特選となります。日展会員。

（西田孝司　学芸主査）

※第6展示室で展示中。

ミュージアムショップ通信

全国都市緑化いしかわフェアは無事閉幕。当館でも協賛展としてナンシー派、作庭記、花と緑、日本伝統工芸展、いやもう、息つくひまもない勢いで開催してきました。今ようやく少し落ち着きを取り戻してきたようです…。

白玉の　歯にしみとほる　秋の夜の
酒は静かに　飲むべかりけり（牧水）

秋は終りましたが、何かこう、お祭りの後の余韻にしばらくひたっていたい心境にもなります。

ということで、今月はショップ正面奥の棚に並んでいる、注ぎ口が丸くなった、風変わりな徳利をご紹介しましょう。モデルとなったのは「染付山水草花文水注（そめつけさんすいそうかもんすいちゅう）」で再興九谷の若杉窯です。若杉窯は一八一一年に開かれ、一八七五年まで続いており、染付の皿や鉢、徳利などの日用雑器も数多く作られました。それでこの独特な形の原型は、仏具の一つである金属製水注（ケンディー）。まぁ、仏前に水を供える容器ですね。焼き物の方では、中国で十六世紀半ば、有田では十七世紀後半から作られていますが、若杉窯では他にほとんど例がないので、特注品ではないかと言われています。年に一回は第2展示室にお目見えします。が、今は収蔵庫でお休み中です。

仏様ご縁のありがた～い一品。これでいただくお酒はまた格別かと。ところでお値段の方は…、筆者の責任にあらず。

染付山水草花文水注
若杉窯　江戸19世紀

（右）染付山水草花文徳利
（定価18,000円）
（左）同、醤油つぎ
（定価15,000円）

休館日

十二月二十五日（火）～一月三日（木）

石川県立美術館だより
第二一八号　平成十三年十二月一日発行
〒九二〇―〇九六三　金沢市出羽町二番一号
TEL　〇七六（二三一）七五八〇
FAX　〇七六（二二四）九五五〇